

14歳、それは一番哲学者に向いている年齢。  
えっ!?! 14歳なんてバカでアホばかりだろうって?  
そう、だからこそ 14歳は“哲学できる”んだ。

14歳レベルの発想が、哲学の歴史を作り上げてきた そのことが、凄くよく分かる一冊なのだ!

周りのみんなの言ってることを、おかしい、変だって感じちゃう人、いるよね?  
そう、それでいい。“みんな”の方が間違ってるって思えばいい。  
自分の考えを“正しい”って信じて、それを徹底的に突き詰める。  
それこそがまさに “哲学すること” なんだ!  
誰に認められなくたっていい。君が正しいと思えばそれでいい。

“みんなの当たり前”を、君が壊すんだ!  
答えを知ろうとするな! 君が答えを作るんだ!  
世の中に向いていない人はみんな、哲学者になれるよ。

“哲学”は君を救わない。でも “哲学すること”は君を救う可能性に充ちている。  
哲学することでしか乗り越えられない壁って、確実にあるんだよ。  
“みんな”に馴染めないからこそ、世界を救うことが出来る。  
はみ出し者こそが、歴史に名を残せる。  
それが哲学なんだ。

さわや書店 フェザン店 長江貴士さん

『古今東西の哲学者たちも  
本書を絶賛!?!』

- 劣等感とは、種である (ドカルト)
- 結果の近くに、常に問いがあるのだ (ラント)
- この本は、哲学の論理的帰結だ。(メーゲル)
- 意味の世界に、この本はうまく馴染まない (サルケゴール)
- ルールの上から世界を睥睨する。その視点の獲得が、まさに神である (ロルトル)
- この本は、世界に引いた一本の補助線だ (ヒョードリヤール)
- (この本の登場で、他の)「哲学入門」は死んだ (ヌーチェ)

※このコメントは全てフィクションです。